（公財）中央果実協会
No.150

米国カリフォルニア州　生食用ブドウの近年の課題とその影響

FRUITNET　2024年7月26日

カリフォルニア州の生食用ブドウ業界は、近年大きく変化している。コーチェラ地域（南部）からフレズノ郡（中部）まで、生産者らはほぼ毎シーズン、生産コストの上昇、労働力の不足、輸出の減少、ますます不安定な気候等、自分達の手に負えない、ビジネスを脅かす可能性のある不安定な状況に直面している。変わらないのは、残念ながら米国の生食用ブドウの消費量で、何十年にもわたって基本的に横ばいである。

輸出市場は長い間、カリフォルニア州の毎年の生食用ブドウ生産量の一定割合を吸収し、国内の収益を支える上で有用だと頼りにされてきた。しかし、パンデミックの到来と世界のサプライチェーンへのその長引く影響により、出荷業者らが大幅に長期化した海上輸送を嫌って輸出に消極的になったため、過去数シーズンは海外市場への販路を確保できる果実が少なくなっている。米国農務省のデータによると2019年から2022年の間に米国の生鮮ブドウの輸出は24％減少し、環太平洋地域への出荷は49％減少した。

昨年の輸出量は1989年以来の最低水準であった。これは、珍しく8月下旬にサンホアキンバレーを襲った熱帯暴風雨により、収穫前の推定2,500万箱相当の果実が被害を受けたためである。2024年の夏は7月2日から同月半ばまで毎日38℃を超え、しばしば43℃を超えるという、すでに観測史上最も暑い夏の1つであるため、今シーズンも輸出に影響を与える可能性がある。このような長引く暑さは、ブドウの木の代謝を停止させ、糖の蓄積や赤色品種の着色に影響を与えており、今年のこの地域の収穫を遅らせる可能性がある。

ジャスミンブドウ園のブライアン・クレトル氏は7月の第2週に、「これまでのところ、信じられないほどの暑さで、果実の出荷が抑えられている。メキシコとコーチェラ地域の出荷はどちらも終了し、取引をサンホアキン産に切り替えたいが、そこからの供給はまだない」と述べている。サンホアキンの生産者は、毎年7月の大部分を通じて国内の流通経路に残っているメキシコ産果実と競うのが常であるが、今シーズンはそうではない。メキシコは自国の暑さの問題により出荷シーズンを早期に終了し、出荷量は当初の見通しを下回った。

コーチェラバレーでは、昨シーズンよりは果実の出荷が多いが、栽培面積の縮小により過去数十年で生産量は大幅に減少している。その結果、ここ数週間、北米全体で生食用ブドウの供給がいつになく不足しており、出荷価格（FOB）が異常に高止まっている。クレトル氏は「フレームとスグラオーネシードレスはどちらも現在26～28ドルで売られている。あと1週間ほどで最初のプレミアム品種が登場するが、これらはさらに価格が高くなる。この暑さが収まる8月の一定の時期まで、販促が可能な量のブドウは期待できない」と話す。

一方、出荷業者にとって供給不足はサンホアキン産の取引を開始する上で問題ではなかったと伝えられている。アンソニーブドウ園の営業担当副社長であるジョン・ハーレー氏によると、この地域で最も早く収穫できる園地を所有するこの業者は、6月下旬からかなりの量の果実を出荷しているという。

ハーレー氏は、「我々のビジネスは、ここ数週間繁忙を極めた」と言う。同氏は、同農場のサンホアキンの在庫は、コーチェラ地域から転送された果実 － 小売業者が好むライセンス品種の在庫 － で補完されていると述べ、「アービン地区（サンホアキンバレー南端のベーカーズフィールド近郊）のフレーム品種はサイズと色が良く、コーチェラから移送した果実と合わせて、シーズンの良いスタートを切ることができた。また、今年はメキシコとの重複がほとんどなかったことも助けになっている」と語った。

しかし、ハーレー氏は、気温が穏やかにならない限り、サンホアキンの総出荷量はシーズン中に減少する可能性があると述べている。同氏は、「糖度がまだかなり低いため、晩生の品種の一部ですぐに日焼けが発生すると思うが、（供給過剰回避の観点から）それは悪いことではないかも知れない」と言い、シーズン後半のカリフォルニア州産のブドウは南米、特にペルーからの輸入によってますます影響を受けていることに言及した。

クレトル氏は、「以前は毎シーズン12月まで果実を売っていたが、今は違う」と述べた。カリフォルニア州が年間1億1千万箱以上の果実を毎年出荷していたのは何シーズンも前のことではない。しかし、サンホアキンの出荷シーズンの最初と最後に発生する外国産との競合は、国際需要の低迷と相まって、需供バランス改善のためにサンホアキンの栽培面積をもっと削減する必要があるかも知れないという憶測につながっている。

パンドル・ブラザーズ社のジョン・パンドル氏は、「カリフォルニア州の業界は、過去数シーズンのような9千万箱台の低水準の出荷でもまだ利益を上げることができる。今年は出荷量が回復してハリケーン・ヒラリー以前の水準に近づいており、品質が適切であればうまく行くはずだ」と述べた。

執筆者：ジェフ・ロング　　（翻訳は情報の提供を目的としており、特定の企業や製品を推奨するものではありません。）